

2016年4月

「コリーグ」49号 目次

巻頭言 (1~3) 研究拠点形成について (3) 戦略的研究プロジェクト (4) 第五回日豪交流セミナーに関する報告 (5) 第43回研究員集会報告 (6) 国際ワークショップ報告 (7) 高等教育公開セミナー報告 (8) 学生シンポジウム報告 (9) センターウェブについて (10) 2015年度の公開研究会 (11) センター往来 (12) 新任者・離任者から一言 (13~17) 情報調査室だより (18)

巻頭言



南半球で触れた高等教育のエネルギー

鳥居 朋子

(立命館大学教育開発推進機構・教授/大学評価室・副室長)

オーストラリアのメルボルンは、世界で最も住みやすい都市だと評されている。筆者はここで2014年9月からの一年間、サバティカルを取る機会に恵まれた。幸運なことに二度目の在外研究である。一度目は、名古屋大学高等教育研究センターに勤めていた2005年にアメリカ・マサチューセッツ州とミシガン州に8ヶ月滞在した。当時は複数の大学をバタバタと訪問し、とにかく自分の経験を量的に増やすことが目的という感じであった。初めての海外生活で、心理的にも余裕はなかったように思う。そうした経験もあり、もし再び在外研究のチャンスが得られたら、どこか一ヶ所に腰を落ち着け、できれば四季を通じた生活に軸足をおきながら高等教育を知るような滞在がしたいと願っていた。その願いを叶えて下さったメルボルン大学高等教育研究センターのリチャード・ジェームス先生はじめスタッフの方々、多忙が常態化する中でありながら快く送り出してくれた本学関係者や同僚諸氏に対して、まずはお礼申し上げたい。

今回、筆者が高等教育についてオーストラリアで感じたことを共有して欲しいとのリクエストを編集者から頂戴した。もとより、今日の高等教育のあり様を大所高所から捉えて書く力は筆者には無い。そこで、有り難くそのリクエストを言葉通りに受け取らせていただき、帰国後半年経って自分の中で結晶化してきたことを少し紹介したく思う。

そもそもオーストラリアでは、学位 (degree) もしくは準学位 (Sub-degree) に相当する教育資格や学位を授与する教育機関が高等教育機関と見なされている。これらは、機関の自律性という点から捉えれば、自己認証機関 (SAI: Self-accrediting institutions) と非自己認証機関 (NSAI: Non-self-accrediting institutions) に大別される。SAIは、内部質保証システムを整備し教育研究活動の質に責任を果たすことが求められており、コースの設置や

No. **49**

教育資格・学位を授与する権限を有する。2015年8月のデータによれば、オーストラリアには43の大学があり、うち40が公立大学である。これらの大学は自己認証機能を有した自律的な存在だ。一方、NSAIはコースやプログラムを設置する際、政府の認可を受ける必要がある。私立のカレッジや公立の継続技術教育機関等、NSAIの数は約140だ。日本と比べて小ぶりだが、高等教育セクターは多様性を内包している。

さて、こうしたデータを超えて、メルボルンでの滞在で大掴みにしたことがらをキーワードで表わせば、質 (Quality), 変化 (Change), 楽しみ (Fun) になる。これらは分離しておらず、数珠つなぎのように想起される。まず、「質」だ。高等教育の質保証は国際的な課題であり、日本でも多くの時間が議論に費やされている。だが、高等教育機関ないし大学が社会的存在であるならば、一般社会から隔離された環境にない限り、その質はありふれた日常生活のここかしこに宿る質と地続きのはずだ。多くのパリスタを魅了するカフェ大国の顔も持つオーストラリアの中で、世界一住みやすい都市とのほまれ高いメルボルンともなれば、高等教育の質への期待もふくらむ。民族的にも文化的にも多彩な国の、多様性をはらんだ高等教育セクターでは、いかに質が担保されているのか。

興味深いことに、近年のオーストラリアの質保証政策は、ある側面で高等教育機関に対するしほりを強化する方向に向かっている。オーストラリアでは、21世紀初頭から独立行政機関である豪州質保証機構 (AUQA: Australian Universities Quality Agency) が中心となり機関監査を実施し、高等教育の質保証に努めてきた。しかし、連邦政府は高等教育の質の維持・向上のため、国として単一の機関が高等教育機関の規制と質保証に携わる必要があると判断し、2011年に高等教育基準評価機構 (TEQSA: Tertiary Education Quality and Standards Agency) を設置した。AUQAの機関監査がSAIと一部のNSAIを対象としたことに比べ、TEQSAの規制はすべての高等教育機関を対象としており、質保証政策ではスタンダードを重視した規制強化が進んでいる。

その背景には、急速に進む高等教育市場のグローバル化がある。大学によっては学生数の3割を占めるといふ留学生 (主にマレーシアやシンガポールの出身) が添える国際的な彩りは、日本のキャンパス風景とは大きく異なる。その豊かな国際色が放つエネルギーは、街に集い、働き、子を育て、カフェで語らう人びとの活気と何ら変わりなく、圧倒的な現実として充満している。海外キャンパスの展開も盛んな中、高等教育はオーストラリアの主要産業であり、国際ランキングでの位置取りを重んじた戦略的な成長ビジネスであると見てよい。いまや、ビジネスの拡張と質保証の両立は、スタンダードという判断のよりどころを支える微妙な均衡の上に成り立っている。

ここで登場するのが「変化」だ。暮らし始めてほどなく気付かされることの一つに、オーストラリアの人びとや社会が持つ「変わることへのためらいの無さ」がある。広大な国土や、メリハリが強く移ろいやすい気候と相俟って、その拘りの無さはあっけらかんとさえしている。変化への適応気質とでも言おうか。高等教育でも、戦略的に強みになると判断されたものは貪欲に取り入れる姿勢が目立つ。例えば、メルボルンモデル (2008年～) に代表される教育改革だ。英国システムの流れを汲むオーストラリアの大学には永らく不在だった教養教育という概念を、メルボルン大学や西オーストラリア大学は教養教育の蓄積の厚い北米から巧みに摂取し、自校のカリキュラムの変革はもとより競合校での改革議論にも影響を与えている。

そして、最後のキーワードの「楽しみ」だ。ある研究大学の首脳が「大学を楽しい場所にしたい」と語っていたのが心に残る。とくに、変化する環境の中で革新を生み出し続けることが期待される大学には、同時にそこで学ぶ学生たちの姿がある。国内外から若者を惹き付け、かれらの瑞々しい感性や好奇心を刺激し、知の創出への参画を促すためには、自由な発想や試行錯誤を許すような場の「あそび」が必要だ。例えば、メルボルンの中心部にあるロイヤルメルボルン工科大学のマスコットは、黒くて長い足を持った有毒のセアカゴケグモ (!) だ。考えてみれば、大学のマスコットが熊でなければいけない決まりはどこにもない。オーストラリアを原産地とするセアカゴケグモのぬいぐるみが鎮座する大学の案内所には、機知に富み、ユニークな遊び心に満ちた校風が窺えた。一時の気晴らしのような愉快さで

はなく、知のコミュニティに属することでこそ得られる楽しさに触れた時、学びへの動機付けは一段と高まるのではなからうか。

溢れんばかりのオーストラリアの高等教育のエネルギーに晒されながら、北半球の日本の高等教育を眺めた時、そこに何が観えたか。正直なところ、筆者には二つの国の高等教育が、グローバル化という国際的な潮流から捉えても、同じ土俵（市場）に立っているとは到底感じられなかった。その是非を問うつもりは無い。ただ、翻ってオーストラリアの高等教育は、「高等教育の不易と流行とは何なのか？」という一つの深い問いを投げかけてくれたように思う。逆説的かもしれないが、南半球で触れた高等教育は、変化する環境への適応も重要だが、改革に改革を重ねることで失うかもしれない日本の高等教育のよさについて、もっと熟慮すべきではないかという示唆を与えてくれた。それが何なのかは、帰国後の研究や交流を通じて同僚たちと多面的に探っていければと考えている。

共同利用・共同研究拠点認定に向けて

丸山 文裕

(高等教育研究開発センター長／教授)

文部科学省では、大学の最新研究設備や大量の学術資料・データ等を、個々の大学の枠を超えて、全国の研究者が共同で利用し、共同研究を行う「共同利用・共同研究」システムの整備を進めてきた。2010年から現在まで全国で70機関近くが拠点認定を受け、活動中である。その多くは大型の研究設備や施設が必要な、理工学系や医学・生物学系の研究機関である。人文・社会科学系で拠点に認定されているのは、まだ少数である。海外の学術資料や経済データを保有する地域研究、経済研究分野の研究センターや研究所が主のものであり、高等教育研究、教育学研究関係の研究所は、今のところ含まれていない。

高等教育研究開発センターは、発足から40年以上人的物的な研究蓄積をしてきた。高等教育関係資料、図書も充実し、当センターのスタッフや大学院生ばかりでなく、国内外の高等教育研究者、大学管理者、行政政策関係者からの利用も多い。また設立以来、毎年開催している研究員集会には、国内の研究者、大学関係者が参加し、さらにほとんど毎年開催する国際研究セミナーには海外の研究者も多い。これらの実績によって当センターは「共同利用・共同研究拠点」として十分な資格ありと判断し、平成28年からの認定に向けて申請を行った。

結果は、残念ながら不採択であった。しかし今後当センターに、共同利用・共同研究体制の充実を図るという予算が配賦される。この措置については、2018年から始まる次期拠点認定に向けて、スタート・アップ・サポートと理解している。

この予算を用いて2016年4月から当センターが中心となり、高等教育の国際研究を進めるために、研究機関、研究者ネットワークを形成する予定である。そこでは、全国の大学教育研究センター、国立教育政策研究所など、またUCバークレー、メルボルン大学、ヘルシンキ大学、北京大学等、海外の機関および研究者と共同して、高等教育に関するデータ整備、国際共同研究を行う。国際共同研究には、公募型研究など新たな試みを開始することも予定している。

共同利用・共同研究拠点は、大学の「研究力強化」、「グローバル化」、「イノベーション機能の強化」の実現と、国際的な頭脳循環のハブ・人材育成拠点として機能することが求められている。当センターもこれらに貢献していくつもりである。コリーグの皆様へ拠点申請に向けてのご理解とご協力をお願いする次第である。

戦略的研究プロジェクト

◆◆◆これからの研究活動について◆◆◆

藤村 正司

(高等教育研究開発センター教授)

これからの戦略プロジェクト活動は、センターが法人化第4期「全国共同・共同研究拠点」(ネットワーク型)採択に向け、平成28～33年度に新規予算が付いたことを受けてこれと融合しつつ推進していく予定です。テーマ(仮)は、高等教育研究開発センターの国際共同推進事業—大学における教育研究の生産性向上に関する国際共同研究—です。大学の教育研究は、経済発展や社会の福利厚生基礎であり、その生産性向上は各国で重要な政策課題になっています。本事業は、国内外の研究機関と海外の大学で行うことを通じ、大学における教育研究の生産性の測定とその要因分析を行うことにより、大学の生産性向上と海外の大学で通用する研究人材の養成に資することをねらいとしています。

大学の教育研究の生産性は、これまで卒業率、学位授与数、就職率などで測定されてきました。しかし、国によって、例えば卒業難易度が異なるので、国際比較には難点があります。今後さらに学生の学修成果を測定できる指標の開発も必要です。また、研究については、使用言語、著作数、引用論文数、受賞数(著作率、引用率、受賞率ではない)等の外形的指標で示されてきましたが、学問分野、使用言語等の差は無視されてきました。大学の教育研究の生産性の研究は、国立大学経営力戦略の基礎であります。これまで大学の生産性と言えば、良くも悪くも自然科学・英文主体の世界大学ランキングに踊らされて、一喜一憂してきました。文系批判の根幹には、この世界大学ランキングの呪縛に縛られた発想があります。この呪縛から逃れるためにも、有効な大学の生産性に関する指標の開発及びそのデータ整備に関する基礎的研究を行う必要があります。このテーマに関心のあるコリীগの皆さまのご協力とご指導が得られれば、幸いに存じます。

◆◆◆2015年度活動を振り返って◆◆◆

戦略的研究プロジェクト東京報告会について

小入羽 秀敬

(帝京大学教育学部助教)

「戦略的研究プロジェクト」は今年で8年目を迎えました。当プロジェクトは、わが国の行政改革と新発展を目指す「経済財政改革の基本方針2007」(2007年骨太の方針)を踏まえて大学・大学院改革のための具体策に関する研究をおこなうことを目的に、文部科学省特別教育研究経費(戦略的研究推進経費)を受けて2008年度に開始された研究プロジェクトです。

一般経費組替え後3年目となる2015年度戦略的研究プロジェクトでは、2015年12月12日(土)に学術センター内一橋講堂において『大学の機能別分化とその国際的動向』と題する研究報告会を開催し、27名の外部参加者に出席いただきました。報告会では基調講演者として、磯田文雄教授(名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院 学院長)をお迎えし、その後に当センター教員・研究員計9名による研究報告を行いました。研究報告は、日本の機能別分化を定量分析や政策分析によって検討したセッションⅠ、海外の事例分析として中国・マレーシア・フランスの機能別分化や統合を検討したセッションⅡの二部構成となっています。各セッションでは以下の研究報告(発表者名)と参加者による活発な議論が展開されました。



【基調講演】

「大学の機能別分化・統合—学問・コンピテンシー・機会均等—」

(磯田文雄 名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院 学院長)

【セッションⅠ】 司会：福留東土 (東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策コース 准教授)

「日本とアメリカの大学管理職調査報告」(丸山文裕 センター長/教授)

「財源配分スキームによる大学の機能別分化に関する数理分析」(渡邊聡 教授)

「機能強化型補助金と大学の補助金獲得行動」(小入羽秀敬 研究員)

「マス型高等教育システムと機能別分化—1955-2014—」(藤村正司 教授)

「高等教育の量的拡大の軌跡と政策効果」(村澤昌崇 准教授)

「大学・学部の消滅—大学入学者数の予測値と学部偏差値から—」(大膳司 教授)

【セッションⅡ】 司会：稲永由紀 (筑波大学大学研究センター 講師)

「アジア型ジェネラル・エデュケーションの可能性について—中国本土と香港の事例を中心に—」

(黄福涛 教授)

「マレーシアにおける大学の機能別分化政策について」(佐藤万知 准教授)

「フランスにおける大学統合の推進—規模・機能の拡大の目指すところ—」(大場淳 准教授)

第五回日豪交流セミナーに関する報告

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2015年9月28日から29日にかけて、広島大学高等教育研究開発センター (RIHE) とオーストラリア・メルボルン大学高等教育研究センター (Melbourne CSHE) との共催で、第五回日豪交流セミナー『世界基準の大学、制度、大学教職員の開発—日豪の比較的視点』がメルボルン大学高等教育研究センターを会場に開催されました。

オーストラリア側からは、Richard James 教授 (メルボルン大学副学長・高等教育研究センター長) をはじめ、Thao Vu 氏, Victoria Millar 氏, Hamish Coates 教授, Truc Le 氏, Sophie Arkoudis 准教授, Salita Seedokmai 氏と米澤由香子氏の8名が参加し、下記について研究発表を行いました。

「イノベーションと大学教授職」Richard James 教授

「オーストラリアの大学における学術的パフォーマンスの管理」Thao Vu 氏

「変化する大学カリキュラムの改革」Victoria Millar 氏

「高等教育の質と学問生産性の向上」Hamish Coates 教授

「オーストラリアの大学における外国人教員」Truc Le 氏

「大卒者のエンプロイアビリティ」Sophie Arkoudis 准教授

「ボローニャ・プロセスの影響と ASEAN を始めとする地域連携」Salita Seedokmai 氏

「日本の大学における教育の国際化」米澤由香子氏

日本側からは、下記の7名が参加し、以下について研究発表を行いました。

「日本における最近のグローバル化とローカル化をめぐる高等教育政策の変化」山本眞一教授

「日本の大学教育政策の変化」小入羽秀敬研究員

「日本の大学ガバナンス改革」大場淳准教授

「だれが日本の大学を支配したのか？」黄福涛教授

「マレーシアの国公立大学の改革」佐藤万知准教授

「日本の会社における外国人学生の募集と雇用」李敏講師

「オランダの大学における英語による学位プログラムを考察する枠組み」小竹雅子氏

これらの報告・議論を通じて、双方が日豪比較という視点から、とりわけグローバル時代における大学教育と研究の国際的競争力の強化という目標が双方の大学教育・研究活動の質向上や、ガバナンスの改善、教職員の能力の開発のあり方に及ぼす影響の性格・広がりおよび限界を明らかにしました。また、参加者はそれぞれの大学における固有の文脈を生かした大学教育・研究活動、制度の再構築、教職員の能力開発のあり方を追求する上で有効な示唆を提示しました。

第43回研究員集会報告

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター准教授)

今年度の研究員集会は、「大学の統合・連携とガバナンスー地域分散、適正規模、機能分化の在り方を巡ってー」と題して、11月3日の一日にて開催された。今回の趣旨は、高等教育の関心の多くがFDやPBL、学習時間などミクロな教育改革へと収斂している中で、マクロな視点からの高等教育のあり方を論じる必要性を訴えるものであった。具体的には、大学の「適正な」規模や組織形態のあり方について、特に連携・連合・統合とそのガバナンスに焦点を絞り、羽田貴史氏（東北大学）、小林信一氏（国立国会図書館）、山倉健嗣氏（横浜国立大学）、白川優治氏（千葉大学）、立石慎治氏（国立教育政策研究所）、両角亜希子氏（東京大学）の6名に話題提供をお願いした。コメンテーターには石橋晶氏（文部科学省高等教育局国立大学法人支援課課長補佐）に、政府的見地からのコメントをお願いした。

羽田氏には、日本の大学の組織形態の歴史の変遷と今後の課題について論じていただき、小林氏には、大学の連携・統合に関する国内外の事例を紹介していただき、今後の展望について積極的なご提案を頂いた。山倉氏には、高等教育研究に不足しがちな理論的枠組みを提供いただくべく、ご専門の組織論や組織間関係・連携論を下地にした高等教育組織の分析のあり方をお示しいただいた。白川氏・立石氏からは、近年進みつつある国立大学の連携・連合・統合の実情について、中期目標計画文書やアンケートデータに基づいてご報告いただいた。両角氏からは、私立大学の連携統合の実情に関する情報提供をいただいた。これら講演・論点提起を受けて、石橋氏からは、文科省の立場から「統合」は政策の狙いではかならずしもなく、連携と「連合」を積極的に進めて欲しい等のコメントが寄せられた。

この2年は、試行的に1日開催としてきたが、主催者側としては、冗長にならず濃密な議論が可能となったのではないと思われる。ただ、センター内部での歩調の乱れから、国際ワークショップとの連携が必ずしも図れなかった。今後の課題としたい。



国際ワークショップ報告

『世界大学ランキングと大学の国際競争力』

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2015年11月5日、広島大学高等教育研究開発センターによって国際ワークショップ『世界大学ランキングと大学の国際競争力』が学生会館レセプションホールを会場に開催されました。

中国上海交通大学からの劉念才教授（高等教育研究院院長）をはじめ、ベン・ソーター氏（QS インテリジェンスユニット責任者）とロバート・モース氏（US ニュース&ワールド・レポート、チーフデータストラテジスト）の3名が参加し、「世界大学ランキングと東アジアの大学のパフォーマンス」、「日本と東アジアにおける大学：考察、教訓、変化」、そして「アメリカの『ニュース』ベストグローバル大学ランキナーその特徴および東アジアの大学、特に日本、中国、韓国への影響とインプリケーション」について講演されました。

日本側からは、松本英登氏（文科省高等教育局高等教育企画課国際企画室室長）が「世界ランキングと日本の大学の国際化」と題して講演をしました。以上の報告を踏まえて、内田勝一氏（早稲田大学・前副総長）から発表内容のポイントや日本の大学が直面している課題について有益なコメントを頂きました。

海外の三人の講演者はそれぞれの大学ランキングの特徴を挙げられたうえで、今後、それぞれの大学ランキングに関する改善すべき点について、次のように論じられました。

第一に、さらに多様で信憑性が高い指標を開発し、より完成度の高いランキングを作ること。

第二に、さらに非英語圏の国における大学の状況や特徴などを考慮し、より広く受け入れられるような大学ランキングを作ること。

第三に、大学の教育と学習活動を含めてより国際的に比較できるようなランキングを作ること。

最後に、おそらくさらに営利活動に取り込み、市場化の原理に基づき関連活動を行うこと。

パネルディスカッションの際には、講演者から日本の大学国際的競争力を高めるために、特に以下の意見が出されました。

第一に、日本の大学は少なくともアジアではまだ高い水準を維持しており、その多くの大学は頑張っているが、シンガポールや中国、韓国などの国における大学はもっと頑張っているだけに、さらなる努力が必要であること。

第二に、日本の大学のランキングをさらに向上させるために、特に国際化のレベルを上げる必要があること。ただし、必ずしも各機関においてその具体的な数値目標を立てなくても良い。

第三に、特にイギリスとアメリカの講演者が言及したことは、中央政府によるトップダウン方式に基づいた世界一流大学育成に関する政策を作成・実施することが必ずしも成功に導くわけではないこと。

最後に、アジア圏における競争がますます激しくなりつつあるが、お互いの教育、研究と学習のレベルを高めるために、アジア圏の関連諸国間における国際的協力も不可欠であること。



高等教育公開セミナー報告

平成27年度高等教育公開セミナー

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

センターは、平成14年度から高等教育に関する諸問題を取り上げる高等教育公開セミナーを毎年開催している。本セミナーは、近年多く開催されている実践に焦点を当てたセミナー類とは異なって、センター教員等の研究に基づいて高等教育に関する基礎的な知識等を提供することを目的としている。対象は、大学の教職員や学生、その他高等教育に関心のある全ての者である。平成27年度は8月20～21日の両日にセミナーを開催したところ、学内外から34名の申し込みがあった（実際の参加者は36名）。広島大学教職員のほか、関東や九州など各地から大学教職員、民間企業関係者らが参加した。

今回のセミナーでは、「大学における学習」を主題として取り上げた。大学における学習に関連して、政策や大学での取り組み、学生の対応、諸外国の状況等について、センター教員・研究員が歴史・統計分析・国際比較といった様々な角度から講義を行った。セミナーのプログラムは以下の通りである。



【第1日】

- 講義1 大学改革の背景と課題（丸山文裕）
- 講義2 「大学における学び」—その背景・実態・改革の方向性—（藤村正司）
- 講義3 「主体的な学び」を考える—ICE ルーブリックを作成する—（佐藤万知）
- 講義4 日本の高等教育の量的展開と政策を振り返る
—機関レベルの規模・範囲の軌跡と政策効果の検証—（村澤昌崇）
- 講義5 「SERU 学生調査」—教育の国際的な質保証に向けた広島大学の取り組み（渡邊聡）

【第2日】

- 講義6 新高大接続テスト導入の経緯と今後の大学教育の課題（大膳司）
- 講義7 大学教育改革の変容—政府は大学教育の何を変えたかったのか—（小入羽秀敬）
- 講義8 教育・学習の経済・社会的効果—汎用的能力に注目して—（島一則）
- 講義9 高大連携の中での学び（秦由美子）
- 講義10 フランスにおける学生の学び（大場淳）

学生シンポジウム報告

シンポジウム「大学と学生」(第2回) 学生による学生支援

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

シンポジウム「大学と学生」は、21世紀の高等教育における学生の在り方や大学と学生の関係等について、学生を交えて検討することを目的として、平成26年に始められたものである。初回であった昨年度に多数の参加者ありセンター内の部屋が手狭であったことから、会場を学士会館に移し、また、学生の参加の便を考慮して、夏季休暇中に27年度のシンポジウムは開催された。

第2回である同年度のシンポジウムでは、「学生による学生支援」を主題に取り上げた。学生支援に関する研究者や実際に学生支援に参加している学生を招いて、講演・報告が行われた後、活発な討論が行われた。登壇者を除く参加者申込者は42人（登壇者を含む実際の参加者は46人）で、学部学生、大学院生、大学教員、大学職員など、様々な出席者があった。コメントの後の討論では非常に活発な意見交換があり、学生参加の現状や課題、今後の方向性についての議論が深めることができた。

シンポジウムのプログラムは以下の通りである。



日時：平成27年9月7日(月) 13時～17時30分 (情報交換会終了20時)

会場：広島大学学士会館レセプションホール

13:00-13:10 開会行事

13:10-14:50 講演

1) 安部(小貫)有紀子(大阪大学)

2) 橋場論(福岡大学)

14:50-15:05 休憩

15:05-16:05 学生による事例報告

1) 奥田貴(東北大学学習支援センター SLA / 理学部4年)

2) 河上友基(広島大学ピア・サポート・ルーム / 工学部3年)

3) 井本圭祐(山口大学 YC. CAM / 理学部2年)

16:05-16:20 コメント 廣内大輔(岐阜大学)

16:20-17:20 討論

17:20-17:30 閉会行事

18:00-20:00 情報交換会

センターウェブについて

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター准教授)

※一部センターウェブの文書から流用しています

広島大学高等教育研究センターウェブサイトが仮復旧しました。仮復旧までには紆余曲折があり、長い時間がかかってしまいました。その経緯は、すでにFacebookにてお知らせしておりであり、端的に申し上げますと、クラッシュ・ダウンを想定して取っておくべきバックアップを、業者が用意していなかったことに起因しています。業者の選定は、ホントに慎重にしなければならないと同時に、我々センター側も、業者側に完全に任せずにしっかり関与することが必要だと思われ知らせられました。

仮復旧のため、全メニュー公開まで今しばらくお時間を頂戴いたしますが、以下のURLからアクセス可能です。

<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/>

The screenshot shows the homepage of the Research Institute for Higher Education (RIHE) at Hiroshima University. At the top left is the RIHE logo and name. To the right is a Google Custom Search bar and links for '新着情報通知サービス', 'サイトマップ', and 'English'. Below the header is a horizontal navigation menu with categories: 'センター概要 (About RIHE)', '研究活動 (Research Activity)', '大学院・教育活動 (Educational Activity)', '出版・情報サービス (Publication and Information Service)', 'センターデータ (RIHE Archives)', and 'アクセス (Directions)'. A large banner image of a building is displayed below the menu. The main content area is divided into several sections: 'NEW センターからのお知らせ' (News from the Center) with a list of recent announcements from 2016.4.12 to 2016.4.7; 'クローズアップ情報' (Close-up Information) with a '準備中' (Under Preparation) status; 'センターレポート' (Center Report) also with '準備中'; '新着情報自動通知サービス' (New Information Automatic Notification Service); and '広島大学' (Hiroshima University) with social media links for Facebook. A '過去のお知らせ' (Past News) button is also visible.

現在復旧したメニューは、お知らせ、大学院入試情報、当センター概略、専攻情報、スタッフ情報です。英語版ウェブページも復旧させる予定ですが、当面日本語ページから順次掲載していく予定です。今後とも高等教育研究開発センターをよろしく願います。

2015年度の公開研究会

*肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テ ー マ
第1回 (2015/6/19)	ジョルジュ・ノバキ氏（一橋大学・森有礼高等 教育流動化センター・教授）	欧州及び日本における質保証： 教授・学習への焦点の移動
第2回 (2015/7/3)	ジョシ・マヘンドラ・キショア氏（インド・マ ハラジャ・クリシュナクマリシンバーヴナガル 大学経済学部・教授／名古屋大学高等教育研究 センター・客員教授）	インド高等教育を概観する： 過去・現在・未来
第3回 (2015/7/30)	ブルース・マクファーレン氏（イギリス・サウ サンプトン大学・教授）	大学教授職と学術的倫理へのチャレ ンジ
第4回 (2015/9/11)	ロナルド・バーネット氏（イギリス・ロンドン 大学 IOE・Ex-Pro-Director） ヘレン・ワトソン氏（イギリス・オックスフォ ード大学 Director of Planning and Resource Allocation） 山本 淳司氏（京都大学教育推進・学生支援部 次長） 篠田 雅人氏（学習院大学学長室経営企画課） コメンテーター：大崎 仁氏（人間文化研究機 構機構長特別顧問）	教職協働 ー日本とイギリスその相違と実態か ら得られる示唆ー
第5回 (2015/10/2)	清水 裕士氏（関西学院大学社会学部・准教授）	高等教育の研究・実務に活かす統計 分析
第6回 (2015/10/13)	ウルリッヒ・タイヒラー氏（ドイツ・カッセル 大学・教授）	知識基盤社会は雇用され得る卒業者 を必要とするか？
第7回 (2015/10/14)	サリ・リンドブロム＝ウランネ氏（フィンラン ド・ヘルシンキ大学・教授）	ヘルシンキ大学における教育質改善 の取組：LEARN プロジェクト
第8回 (2015/10/27)	ヤミナ・ベタアール氏（フランス・ロレーヌ大 学人文科学研究機構・准教授）	大学の機能別分化と組織変容： フランスの事例
第9回 (2015/11/19)	筒井 淳也氏（立命館大学・教授）	高等教育研究・実務に活かす統計分 析2
第10回 (2016/1/9)	丸山 和昭氏（名古屋大学高等教育研究セン ター・准教授） 野地 有子氏（千葉大学大学院看護学研究科・ 看護学部・教授） 井上 真智子氏（浜松医科大学・特任教授） 沖田 一彦氏（県立広島大学理学療法学科保健 福祉学専攻・教授）	大学でプロフェッショナリズムをど う育成するか
第11回 (2016/3/7)	ジュリー・ホール氏（イギリス・ローハンプト ン大学・副学長／教授）	デジタル時代における大学の授業を 考える：21世紀における学習

センター往来【2015年4月～2016年3月】

*所属は当時のもの（敬称略）

<2015年>

- 4月 長谷部 千乃（シュプリングージャパン）姜 星海（北京師範大学教育学院）Jane knight（トロント大学）
- 5月 Van de Wende Marijk（アムステルダム大学）
- 6月 György Nováky（一橋大学）多田 愉可（広島文化学園大学）
- 7月 K. M. Joshi（マハラジャ・クリシュナクマリシンバーヴナガル大学）田中 正弘（筑波大学）林 隆之（大学評価・学位授与機構）馬本 勉, 濱田 縁, 伊藤 俊（県立広島大学）石倉 佑季子（大阪大学）Bruce Macfarlane（サウサンプトン大学）Robert Schalkoff（山口県立大学）
- 8月 馬本 勉（県立広島大学）三隅 隆司, György Nováky, 加藤 真紀（一橋大学）
- 9月 安部 有紀子（大阪大学）廣内 大輔（岐阜大学）橋場 論（福岡大学）井本 圭祐（山口大学）奥田 貴（東北大学）河上 友基, 重田 あずさ（広島大学）ロナルド・バーネット（ロンドン大学）ヘレン・ワトソン, アリソン・ビール（オックスフォード大学）山本 淳司（京都大学）篠田 雅人（学習院大学）大崎 仁（人間文化研究機構）
- 10月 清水裕士（関西学院大学）佐渡 紀子, 加利川 友子, 三倉 康博, 入江 みどり（広島修道大学）Ulrich Teichler（カッセル大学）Sari Lindblom-Ylänne（ヘルシンキ大学教授）
- 11月 **第43回研究員集会・国際ワークショップ招聘者** [坂越 正樹（広島大学）夏目 達也（名古屋大学）羽田 貴史（東北大学）小林 信一（国立国会図書館）渡部 芳栄（岩手県立大学）山倉 健嗣（横浜国立大学）白川 優治（千葉大学）立石 慎治（国立教育政策研究所）両角 亜希子（東京大学）山本 眞一（桜美林大学）石橋 晶（文部科学省）西谷 元（広島大学）劉 念才（上海交通大学）Ben Sowter（QS社）Robert J. Morse（US ニュース&ワールド・レポート）松本 英登（文部科学省）内田 勝一（早稲田大学）] 筒井 淳也（立命館大学）林 佐平（中国教育国際交流協会）
- 12月 なし

<2016年>

- 1月 井上 真智子（浜松医科大学）沖田 一彦（県立広島大学）野地 有子（千葉大学）丸山 和昭（名古屋大学）
- 2月 湯 曉蒙（広州大学）劉 少雪（上海交通大学）
- 3月 Julie Hall（ローハンプトン大学）石崎 宏明（文部科学省）杉本 和弘（東北大学）

新任者・離任者から一言

2016年度客員研究員



小出 龍郎(こいで たつろう)

愛知学院大学 高等教育研究所長/教授

この度は、客員研究員としてお声をかけていただき、ありがとうございます。長年、特色GPをはじめ、第三者評価および機

関別大学認証評価に係わってきておりますが、学内では研究所の責任者として主にアクティブ・ラーニングをはじめ、学生の学修成果および教育の質保証に取り組んでおります。

近年、国境を越えた人材の流動化が盛んとなり、同時に高等教育のグローバル化が急速に進展し、競争が激化してきています。このような変化に伴う人材需要に即応し、質の高い専門人養成のための新たな高等教育機関の制度設計が審議されており、国際的な通用性の観点からも、適切な質保証の仕組みを整えていくことが重要であります。

微力ではございますが、センターに貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



清水 栄子(しみず えいこ)

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室助教

このたびは貴センターの客員研究員としての機会をいただきありがとうございます。

現在は愛媛大学にて、学内の学生調査等を実施し教育改革に取り組む教学IRを担当するとともに、学内、SPOD(四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)や教職員能力開発拠点を通じて教職員の能力開発に取り組んでいます。学生の学びの促進を意識して、日々の業務にあたっています。そのためにも研究と実践の融合は必要だと考えています。貴センターから多くのことを学び、微力ではございますが貢献できることができればと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



新谷 康浩(しんたに やすひろ)

横浜国立大学教育人間科学部准教授

このたびは貴センターの客員研究員に加えていただき大変光栄に存じます。私の専門は教育社会学で、これまで就労と高等

教育の関連について研究してきました。高専教育

や学卒無業者、キャリア教育など幅広く扱ってきましたが、これらの研究を貫く軸はまだうまく言語化できておりません。日本の雇用が揺らいでいると語られている中で、何を高等教育の機能とみなすのか、先生方と探っていければと考えております。私自身、貴センターにとってどの程度お役に立てるのか不安ではあるのですが、少しでも知的貢献につながるよう努める所存です。どうぞよろしくお願いいたします。



橋場 論(はしば ろん)

福岡大学教育開発支援機構講師

この度は、貴センターの客員研究員を拝命し、大変光栄に存じます。同時に、身に余る役目を仰せつかることとなり、襟を

正す思いでおります。

これまで、学生支援を主たる対象として研究を進めてまいりましたが、現在の勤務校ではFDの実務担当者としての任に就いております。高等教育政策に促され(翻弄され)変化しつつある大学の現場にて日々の業務に携わっているわけですが、そのような状況にあって、現実の大学の姿を照らす鏡としての高等教育研究の意義を痛感しております。貴センターの碩学の先生方に学ばせて頂きつつ、研究に取り組んでまいりたいと考えておりますので、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



羽田 貴史(はた たかし)

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

久しぶりにRIHEの一員になります。プロ野球では、9年プレイするとフリーエージェントの資格が得られ、他チームへ移

籍できます。大学では、7年に1度のサバティカルにより、新しいテーマに挑んだりする機会が与えられるということになっています。残念ながら21世紀の日本の大学には、還暦を過ぎた教授にそのいずれも与える余裕はないようです。東北大学に移って10年目を迎えました。そこでの仕事の中心は、大学教員のキャリア・ステージの研究と専門性開発プログラムの推進でした。ラスト・ステージにある自分を実験体に、退職前後の大学教員の研究と、スピン・オフしたテーマである研究倫理を深める機会としたいと思います。

2016年度学内研究員



小川 佳万(おがわ よしかず)
大学院教育学研究科教授

縁あって昨年広島大学に戻ってきました。私のキャリアのスタートが貴センターであり、たいへん光栄に感じております。

現在、教育学研究科の比較国際教育学研究室で日々格闘しておりますが、同じ教育学研究科であっても前任校の東北大学とはアカデミック・カルチャーがかなり異なっていることをたいへん興味深く感じております。現在は同僚とアジア地域の大学入試制度改革の国際比較研究に従事しておりますので、何らかのかたちで貴センターに還元させていただければと考えております。どうぞよろしく願いいたします。



坂越 正樹(さかこし まさき)
大学院教育学研究科教授

専門は教育哲学、教育思想史です。19/20世紀転換期以降のドイツを中心に、大学の中で初めて教育学講座 Lehrstuhl が開設された頃の「学としての教育学」の成立状況を研究対象としてきました。それに続くワイマール期からナチ支配下での教育学と教育学者の姿も極めて刺激的で示唆的な在り様を示しています。この歴史的研究課題から100年近くたった現在、高等教育改革の実際に関わる場面が増え、大げさに言えば社会の中の大学の位置値、両者の遠近、距離の取り方を考えさせられています。



松下 毅彦(まつした たけひこ)
医学部附属医学教育センター
副センター長、准教授

このたび学内研究員に加えていただきました医学教育センターの松下です。私は平成24年の医学教育センター設立時に広島大学に赴任して参りました。現在は、医学部医学科の教育カリキュラムの開発・実施・点検評価及び改善を主な業務としております。

医学部での教育は、学問を修め教育する学府としての側面の他に、プロフェッショナルとしての医療人を養成する職業訓練学校としての側面も有しており、知識、技能、態度のすべてを統合した実践的診療能力が身につくような教育を行う必要があります。このような教育現場での経験が、少しでも皆様のお役に立てればと思っております。よろしく願い致します。



吉田 香奈(よしだ かな)
教養教育本部准教授

RIHEには2000・2001年度に助手として在籍し、当時センター長であった茂里一紘先生をはじめ、有本章先生、山野井敦徳先生、羽田貴史先生、米澤彰純先生などの諸先生方に大変お世話になりました。僅か2年間でしたが高等教育財政やFDなどの研究プロジェクトに加えて頂いたことは、研究者としての土台を作る上で大変貴重な経験となりました。その後、山口大学での勤務を経て、現在は、広島大学教養教育本部においてFDやカリキュラムの改善に携わっています。今回、学内研究員としてRIHEの活動に再び参画する機会を与えて頂きましたので、校務・研究の両面においてさらに連携を深めることができると考えています。どうぞよろしく願い申し上げます。

2016年度研究員



野村 朋絵(のむら ともえ)

平成28年4月より、研究員としてお世話になることになりました。これまで院生として高等教育研究に取り組んで参りましたが、自分の力不足を痛感し、途方にくれることも少なくありませんでした。しかし、先生方や職員の皆様、院生の皆様からの温かいご指導・ご支援のおかげで、今日まで研究を続け、今後も続けることができることに、感謝の言葉もありません。恵まれた研究環境から吸収をせばかりだった院生生活とは気持ちを切り替え、今後は研究員としてRIHEにどのような貢献ができるかを考えながら、日々努めていく所存です。博士論文の執筆にも尽力し、今後も先生や職員の皆様にはご迷惑をお掛けすることもあろうかと思いますが、ご指導のほど、どうぞよろしく願い申し上げます。

2015年度離任者



小入羽 秀敬(こにゅうば ひでゆき)
帝京大学教育学部助教

センターには2011年4月から5年間、先導的の大学改革推進委託事業、戦略的研究プロジェクトの研究員としてお世話になりました。もともと教育行政学の研究をしていた私が高等教育研究に手を広げることに着任当初は色々

な不安がありました。センターの先生方や職員・院生の皆様のおかげでどうにかファーストキャリアを無事に終えることができました。4月からは帝京大学教育学部の教員として教育行政、教育制度・経営の研究や授業に携わることになり、今までの専門に戻ることとなりますが、高等教育を対象とした研究も続けて行く所存です。高等教育研究を続ける限り、センターとの縁は切れなと思いますので、これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。



島 一則 (しま かずのり)
東北大学大学院教育学研究科准教授

2007年10月に着任してから、2015年10月の東北大学大学院教育学研究科に移るまで、あっといふ間の8年間でした。うち1年間はペンシルバニア州立大学での在外研究期間でしたので、実質7年間となります。高等教育研究開発センターは、世界的な高等教育研究の拠点として、世界有数の資料室を備え、事務スタッフも質量ともに充実し、一流の高等教育研究者がそろった稀有な場所です。そうした場所に身を置けたこと、特に国際的な研究活動といった点では、貴重な経験をさせていただきました。こうした経験を活かし、新たな職場では、同僚や学生たちに大いに刺激を受けながら、新たな研究課題に取り組む毎日を過ごしておりますので、引き続きよろしくお願ひいたします。また最後になりますが、センターの益々のご発展を心より祈念いたしております。

修了生



朱 映雪 (しゅ えいせい)
博士課程前期修了 (2016年3月)

2014年修士課程前期に入学してから2年間が経って、無事に修了することになりました。今までの人生で、こんなに早く過ぎ去って、凝縮され、充実した2年間を経験したことは多くありませんでした。これは、先生各位を初め、RIHEの方々からいただいた熱いサポートのおかげだと思っておりますので、心からお礼を申し上げます。

専攻についてほぼ素人だった私が、この2年間の勉学を通して、高等教育学の魅力や教育の重要性を肌で感じられるようになりました。卒業後も教育業界で仕事を探してみたいです。大学教育が

国際化している現在、自分の力で、日中留学生交流事業に貢献できればと考えております。



謝 妍笑 (しゃ けんしょう)
博士課程前期修了 (2016年3月)

この度、博士課程前期を修了いたしました。センターの先生方、職員の皆様、院生の皆様には、様々なご心配をお掛けいたしました。この二年間、学問のことだけではなく、生活の面でも色々と助けていただきました。成長を実感し、有意義な日々を過ごせました。

皆様のおかげで、外国人の私は今春から日本の会社員として働きます。今後、RIHEで身につけた知識を活かし、精一杯頑張っていきます。最後に、私にご指導を賜りました主任指導の大膳司先生に厚く御礼申し上げます。



呉 嫻 (ご かん)
博士課程後期修了 (2016年3月)

来日して6年目で博士号を取得することができました。センターの皆さんにいろいろとお世話になりましたことを心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

広島大学高等教育研究開発センターでの研究生生活が、指導教員の黄先生を始め、たくさんの先生方々と先輩たちのご指導のもとで、無事修了できて大変うれしく思っております。また、センターで行われた全日本及び国際規模の研究会にも参加させていただいたことも光栄に存じます。恵まれた研究環境したで伸び伸びと研究を進めさせていただいたことを心から感謝しております。

この度は、帰国することになりましたが、ここで学んだことを活かしながら研究に取り込んで生きたいと思ひます。まだまだ未熟で力不足ですが、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



三好 登 (みよし のぼる)
博士課程後期修了 (2016年3月)

広島大学高等教育研究開発センターにて、2012年から丸山文裕先生にご指導いただき、2016年に博士学位(教育学)を取得し、卒業することとなりました。センターは、9名の専任教員と6名の事務職員から構成され、高等教育関連の図書を備えた情報調査室もあり、充実した教育研究環境が備わっています。大学院で

は、地道に研究貯金をしていくことが求められ、その成果が博士論文となりますが、そのためにセンターのリソースは貴重なものでした。大学院生活をセンターで過ごすことができたこと、博士前期課程の指導教授であった大膳司先生、博士後期課程の指導教授であった丸山文裕先生を含めてセンターの教員と出会えたことは、私にとってかけがえのない財産でした。心からお礼申し上げます。そして今後とも折に触れて、お会いすることができればよいと思っています。お世話になりました。

新 入 生



于 洋 (う よう)

博士課程前期入学 (2016年4月)

2016年4月より博士課程前期に入学した于洋と申します。この間、黄先生をはじめとする諸先生方の丁寧なご指導、また、親切な職員の皆様のご支援により、大学院生活を有意義に過ごさせていただいております。この場をかりまして改めて御礼申し上げます。

私は中国と日本の留学生政策に関心を持っており、歴史的と比較的な視点から、中国と日本の留学生受け入れ政策を研究したいと思っております。これから、自分の研究を一層深めて、頑張りたいと思います。今後多くの方にご協力をいただきますが、よろしく願いいたします。



王 嘉 (おう か)

博士課程前期入学 (2016年4月)

王 嘉と申します。2015年4月から大学院生を目指す研究生としてRIHEで勉強させていただきました。柔らかな風に顔をなでられ、生命が生き生きと活動を始め、春の訪れを告げる桜も咲き誇る2016年の4月に、博士前期課程に進学します。このRIHEに入ることの喜びをしみじみ感じています。

私にとって、この時期は人生の新しいスタートです。これから、人生を充実させるために、意義ある留学生活を送り、自分の目標の達成に向けて日々努力して、真面目な研究者になるように一生懸命頑張っております。世界各国から集まってきた仲間と共に、勉強しながら成長していきたいと思っております。2015年からの一年、センター長ならびに諸先生方、そして先輩方にはあたたかくご指導いただきありがとうございます。これからも、よろしく願い申し上げます。



周 学文 (しゅう がくぶん)

博士課程前期入学 (2016年4月)

周学文と申します。天津财经大学を卒業しました。今、研究課題は日本の国立大学法人化に関する考察—広島大学を例として、です。広島大学法人化を事例に日本の国立大学法人化の背景、動因や改革の過程、大学法人制度の主要な内容と措置、大学法人の地位や法人の性格さらに大学法人制度実施の影響、効果を考察し、分析します。なぜならば日本の法人化の歩みが既に10年以上を経過した今現在、改めて日本の各国立大学がどのように法人化に対応してきたか、また法人化は結局どのような影響をもたらしたかについて深く考察し研究することが必要であると考えているからです。

また、今後博士前期を修了したら、博士後期に進学して、高等教育をさらに研究したいと思います。



薄 学 (はく がく)

博士課程前期入学 (2016年4月)

2015年10月より、自分は研究生の一員としてRIHEでの学習及び研究の貴重な機会を得られることに、深く感謝しております。

この半年、教育学の授業に出て、新しい知識を身につけ、狭き視野が広がられました。また先生方、スタッフ及び研究室の皆様との交流を通じて、新たな見解を得ることができました。様々な角度から物事を分析する技術に欠けていた自分は、先生から異なる側面からものを見ることの指導をいただいて、物事の多方面の捉え方を鍛え始めました。これからも、学習に精進して、研究を深めたいと思います。何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



樊 怡舟 (はん いしゅう)

博士課程前期入学 (2016年4月)

上海から来た留学生兼新入生の樊怡舟(はんいしゅう)です。RIHEで修士課程を履修することになった今年は、単なる学識を学ぶ者から学問を研究する者へとキャラクターの劇的変化の一年でありながら、更に学習生活と国際交流で新たな一步を刻み、己の可能性を探り、飛躍的な一年になるよう頑張りたいと思っています。現在着手している研究のキーワードは、大学の教養教育、第二外国語教育

の目標、そしてICTの生かされた指導法と三つになっております。これから研究テーマに関しているや関していないアドバイス、ディスカッションなどがいただければと思っています。先生の方々、そして諸先輩方、どうぞよろしく、ご指導のほどお願いいたします。

*上記の方々以外に、2016年4月は宮田弘一さんが博士課程後期に入学されました。

研 究 生



Ha Thi Thu Trang
(2016年4月入学)

I am Ha Thi Thu Trang. I am a Vietnamese. I have nurtured a dream to study in Japan for a long time. With the warmest welcome and the best support from my Professor, her colleagues and administrative staff, I largely believe that RIHE will be the best place to make my dream come true. Consequently, I feel my responsibility is actively contributing to academic and social activities at RIHE. I desire to learn from teachers, friends as much as possible. Besides, I wish to bring knowledges of people, culture, education in my country to you. Thank you.

外国人客員研究員



施 雨丹 (し うたん)
華南師範大学教育科学学院准教授
(2015年1月～2015年12月滞在)

このたびは客員研究員として貴センターで一年間研究交流の機会に恵まれ、大変光栄に存じます。十年ほど前に、私は日本国立大学法人化に興味を持つようになり、資料を調べている内、広島大学高等教育研究センターは日本高等教育研究分野で日本屈指の機構だということが分かり、もし貴センターで学習研究ができたらと思っていました。いまその夢が叶いました。私は心からセンターの先生方、特に指導教授の丸山文裕先生に感謝を申し上げたいと存じます。

一年の研究時間は短いですが、日本の高等教育、特に国立大学の改革を知るのに非常に役に立ちました。日本国立大学の改革の加速につれて、注目すべき改革についての問題もますます多くなって

きました。比較教育学者として、微力ながらも、日本高等教育の研究に力を尽くしたいと思いません。今後とも引き続きご指導をいただきますように、よろしくお願いいたします。



湯 暁蒙 (とう きょうもう)

広州大学高等教育研究所准教授
(2016年2月～2016年8月滞在予定)

日本に勉強に来るのは長い間の願望でした。この度、広島大学高等教育研究開発センターの外国人客員研究員の機会をいただき、本当にありがとうございます。

私の専攻は高等教育学で、主たる研究分野は高等教育政策と歴史です。近年、私の出身の台湾教育政策研究センターが、台湾教育に力を入れています。しかし、その中で、台湾教育に関する基礎的研究の不足を感じています。そこで最近台湾高等教育史に注目しています。周知のように、台湾高等教育は日本植民時代に生まれました。日本学者の関連研究はとても深く、豊富な研究成果を蓄積しています。今度この貴重な交流機会を利用して、研究視野を広げて、研究レベルを高めることを希望しています。



Liu Shaoxue

Professor, Graduate School of Education,
Shanghai Jiao Tong University, China
(2016年2月～2016年3月滞在)

From Feb. 14 to March 13, I have joined RIHE as a visiting researcher. During that time, I spent most of the time to continue my research on comparing study of the requirements of Doctoral Degree granting in different universities worldwide. Though the doctoral education is more alike among different universities, there are still obvious differences exist between institutions, universities, countries, as well as fields.

情報調査室だより

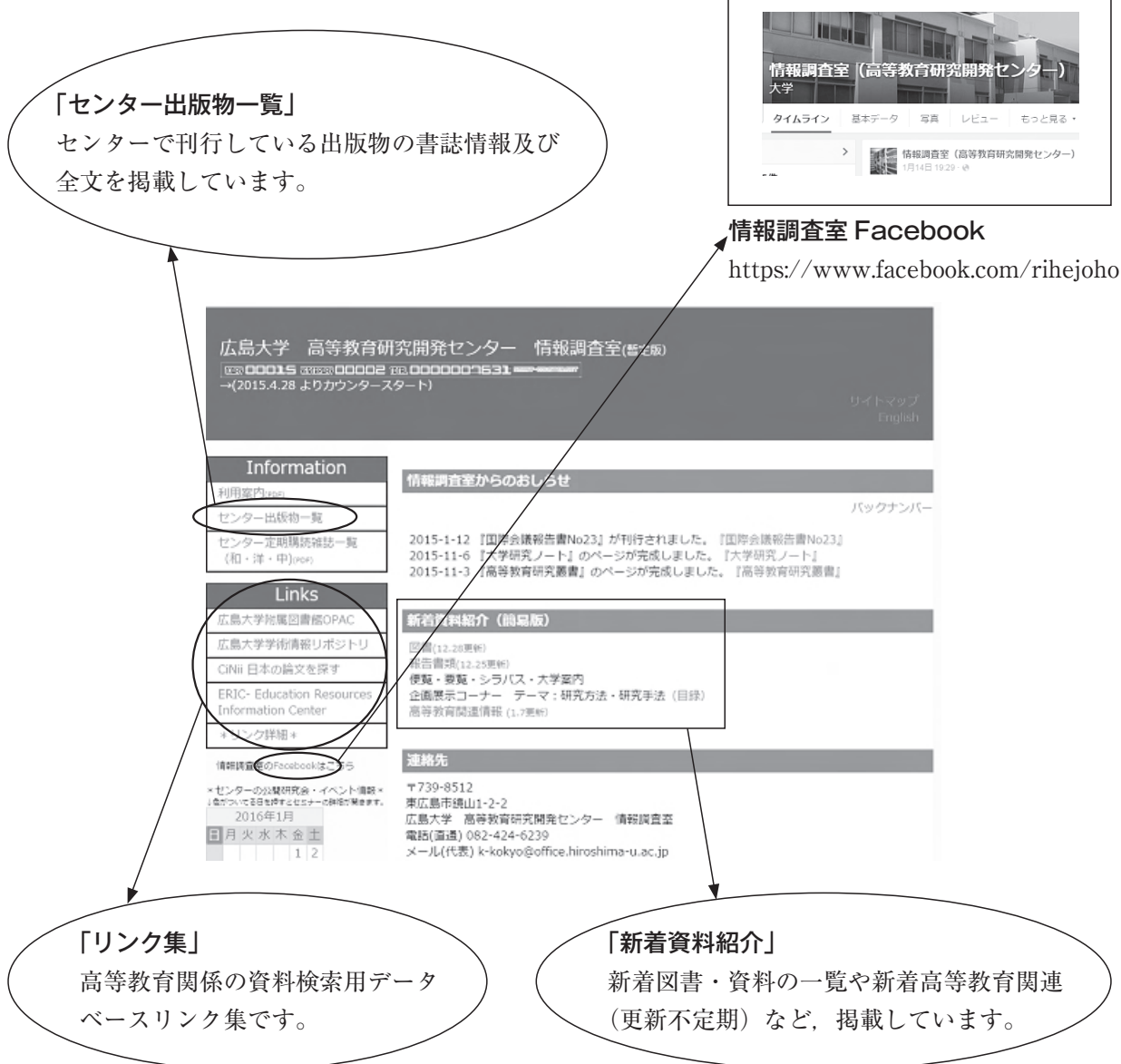
情報調査室のホームページを開設しました！ぜひ、一度のぞいてみてください。

- 日本語サイト：<http://rihejoho.hiroshima-u.ac.jp/>
- 英語サイト：http://rihejoho.hiroshima-u.ac.jp/index_en.html



《日本語サイトの紹介》

日英サイトは、それぞれコンテンツが違います。今回は紙面の関係もあり、日本語サイトのみをご紹介します。



「センター出版物一覧」

センターで刊行している出版物の書誌情報及び全文を掲載しています。

情報調査室 Facebook
<https://www.facebook.com/rihejoho>

「リンク集」

高等教育関係の資料検索用データベースリンク集です。

「新着資料紹介」

新着図書・資料の一覧や新着高等教育関連（更新不定期）など、掲載しています。